

群馬県総合教育センター 幼児教育センター ぐんま幼児教育センターだより

第41号 令和3年12月

ニューノーマルの時代を迎えて

群馬県総合教育センター 所長 竹之内 篤

昨年、初孫が生まれ、今年の10月で1歳になりました。最近では、伝い歩きやつかまらないうで立てるようになり、感情表現も豊かになってきました。また、以前と比べて人見知りも激しくなり、次に会うまでに期間が空いてしまうと、私の顔をじっと見つめ、そのうち泣き出してしまうようにもなりました。しかし、慣れてきた頃にしっかり目を見て話しかけると、言葉はわからなくても伝えたいことは感じるようで、私に合わせて笑ったり、あっちに行けと指図をしたりします。その様子を見ていると、子供は、相手の表情を認知し、感受性や社会性などを身に付けながら、人と人との信頼関係づくりの土台を築いていることをあらためて実感させられます。



大人でもそうですが、日常生活で大切なことは、人間関係づくりであり、互いに信頼関係を構築できることだと思います。相手の顔の表情や話す口調などから、感情や思いを感じ取りながら、顔と顔を合わせ、言葉のやり取りを繰り返すことにより、共同性や道徳性が芽生えてきます。しかし、コロナ禍の今、集まりを避け、人との接触の機会を減らさなければならぬ状況となっています。さらに、顔の大部分をマスクで覆い、口元や頬も見えず、人の表情を判断しづらい状況が続いており、このような状況が当たり前になりつつあります。

各幼児教育施設においてもマスクの着用が定着し、日常の教育・保育において、様々な課題も出てきていることと思います。「株式会社 明日香」から今年の9月に発表された保育士を対象とした調査では、「保育中にマスクを着用することで生じる問題や懸念と考えること」という問いに対して、「表情が伝わらないため子供が表情から感情を学びとることができない」（61.1%）、「読み聞かせなどの際に声を通りにくく、子供たちが上手く聞き取れていない」（58.9%）、「口の動きがわからないことで言語面の成長に影響がありそう」（53.7%）という結果だったということです。また、約3割の保育士が、「マスクを着用したうえでは、子供たちと十分なコミュニケーションが取れていない」と回答しており、各幼児教育施設においても、これらの課題の解決に向けて、試行錯誤を繰り返す中で、様々な工夫をしてきていることと思います。

コロナ禍をきっかけとして、ニューノーマルの時代を迎えて、人々の暮らし方は大きく変化しました。しかし、子供たちは、社会の宝であり、次代を担う子供たちを育てるという私たちの使命は何一つ変わっていません。幼児教育センターとしても、幼児教育施設や家庭等と課題を共有し合い、共に考え、頑張る皆さんをサポートしていけるよう取り組んでいきますので、引き続き、よろしくお願いいたします。



「ぐんま幼児教育センター
だより第41号」をお届け
します。

- 1 ページ：「群馬県総合教育センター所長による巻頭言」
- 2 ページ：「今年度の研修講座等について」
- 3 ページ：「幼児教育センター 調査研究事業について」
- 4 ページ：「幼児期の教育コラム」

今年度の研修講座について

<12月1日現在の状況>

今年度もコロナ禍のため、多くの研修講座がオンライン研修となりました。オンライン研修では、各園での受講が難しい場合、教育委員会等で受講するなど、市町村教育委員会の皆様にご協力いただき、大変お世話になりました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いたします。

幼稚園等新規採用教員研修

・研修日数：9日（集合1日 オンライン8日）

<受講者の声>

事前にパワーポイント資料がダウンロードでき、講義が受けやすかった。どの講義も大変参考になり、新任としての心構えができた。オンライン研修は自分のペースで学べてよかった。

幼稚園等3年目経験者研

・研修日数：1日（オンライン1日）

<受講者の声>

3年目の教員に求められることについて意識して今後の業務に生かしていきたいと思った。オンラインでも話し合いをスムーズに行うことができ、資料も豊富でとても分かりやすかった。

新任幼稚園等園長研修

・研修日数：2日（オンライン2日）

終了

<受講者の声>

様々な園の情報が得られてよかった。遠方からの出張の負担を考えると、オンライン研修は続けてほしいが、直接顔を合わせることで仲間づくりになるので集合研修の機会もあるとありがたい。

幼稚園等5年経験者研修

・研修日数：2日（オンライン2日）

<受講者の声>

初めてのオンライン研修だったが、他の参加者と意見交換ができるよう工夫されていてよかった。初心に戻って再確認できることがたくさんあった。研修を通して更に資質・向上を目指したい。

新任幼稚園等副園長・教頭研修

・研修日数：1日（集合1日）

終了

<受講者の声>

コロナ対策がされていて、安心して参加することができた。すべての講義が勉強になった。自分の役割について改めて考え、知ることができた。職員間の連携の大切さを十分感じた研修だった。

幼稚園等中堅教諭資質向上研修

・研修日数：7日（集合2日 オンライン5日）

<受講者の声>

他園の先生の考えを聞いたことがとても勉強になった。集合研修では他園の先生方との何気ない会話ができて、情報交換も充実してありがたかった。オンライン研修は移動もなく、参加しやすかった。

幼児教育研修講座

・研修日数：1日（集合1日）

終了

<受講者の声>

パペットを実際に作り、演じ方を教えていただき、すぐに保育に生かせる内容であった。保育に取り入れる際に気を付けるポイントも、実演を交えて教えていただいたのがよかった。

今年度の夕やけ保育研修会について

<12月1日現在の状況>

今年度はオンラインで8回の研修を企画し、12月27日(月)の特別講演を残すのみとなりました。各回に、たくさんの皆様のご参加をいただき、感謝申し上げます。7回の研修参加者の合計は、260名ほどになりました。

今年度は、複数の回に御参加いただく方が多く、オンライン研修だからできることだと感じています。12月27日(月)の特別講演会も申込み受付中です。皆様のお申込みをお待ちしています！！

「保育者の指導力向上に向けた支援」について

幼児教育センターでは昨年度までの4年間（平成29年度～令和2年度）、幼児教育施設と小学校の連携・接続に関する研究を行ってきました。そして令和2年10月には、リーフレット「幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続に向けて」を発行し、本県の幼児教育施設と小学校の連携・接続に関する課題を乗り越えるヒントを紹介しました。各幼児教育施設及び小学校等では、引き続き御活用をお願いいたします。

今年度からは、新たな研究テーマ「保育者の指導力向上に向けた支援」を掲げ、研究を行っています。始まったばかりの研究ではありますが、研究デザインをお伝えします。



保育者の困り感

幼児期の教育の考え方、「しくみ」について、分かっているようで分からないところもあるような気がする。

仕事は増える一方だ。多忙化解消には、ほど遠い。

「遊ぶ」「生活する」
ことの本質的な意味

- 記録の効率的な記述
- 効果的な分析、活用（ICT活用）

↓
幼児理解

- ねらい
 - 内容
 - 環境の構成
- の関係性と具体的な記述方法
指導計画・週日案

- 環境としての保育者
- 潜在的カリキュラム
- 同僚性

幼児が環境に関わり遊ぶことを通して「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を育てていくために、幼児教育施設における指導の改善方法を提案し、現場の保育者の支援につなげる。

連絡先 群馬県総合教育センター 幼児教育センター

TEL : 0270-26-9203 FAX : 0270-26-9222

E-mail : youji@edu-g.gsn.ed.jp

「遊び」-「遊ぶ」をめぐる教師の視点と“構え”

みなさんは、子供の「遊び」をどのように捉えていますか。仲間と一緒に笑顔で活動していることを、「遊び」をしていると捉えますか。この「遊びをしている」と「遊ぶ」に違いはあるのでしょうか。本稿は、子供の育ちを支える教師の指導の在り方について、「遊び」-「遊ぶ」をめぐる教師の視点と“構え”という視座から考えていきたいと思えます。

「遊び」については、ヨハン・ホイジンガの「ホモ・ルーデンス」やロジェ・カイヨワの「遊びと人間」をはじめ、様々な考察が行われてきました。私が本稿で取り上げるのは、杉原隆の論考です。杉原は「生涯スポーツの心理学」（2011）にて、内発的に動機づけられた活動こそが「遊び」であるとし、「遊び」を連続体として捉えることを提言しています。人間は、一つの動機だけで活動することは少ないと考えられますので、遊びを内発的動機かそうでないか（外発的動機）という二分法で捉えることは困難であるわけです。そこで、内発的動機づけを「遊び要素」、外発的動機づけを「非遊び要素」と考え、内発的動機づけが強いほど遊び的な活動であり、逆に外発的動機づけが強くなるほど遊びではなくなるとしたのです。例えば、友達と一緒にやりたい（親和動機）、先生に褒められたい（承認動機）、その活動の面白さに惹かれている（内発的動機）などのように同時に複数の動機をもっている場合、友達と一緒にやりたいとか先生に褒められたいとの思いが強い場合は非遊び要素が高く、その活動の魅力や面白さに惹き付けられている場合は遊び要素が高いということになります。このように、同じ活動をしていても、遊びとしての活動という場合もあれば、まったく遊びとは言えない活動もあることになるわけです。このような「遊び」の捉えを見ていくと、私たち教師は前述の意味での「遊び」の発生を支え、時間的・空間的・人的な保障をしていくことがその役割と考えられます。

しかし、子供と共に過ごす中で意識を向ける必要があるのは、むしろ「遊ぶ」ではないのかという考えにも至るのです。「遊ぶ」という行為の中で子供は何を経験し、何が育ちつつあるのかを読み取って、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きつつ、子供理解に基づく一人一人の発達課題に子供自身が向かっていく（乗り越えていく）状況をつくるのが、本質的な教育の意味（教師の役割）と考えるのです。この教育実践には、幼児期の教育に携わる教師（保育者）の高度なファシリテーションスキルが有効に働いていると考えられます。ファシリテーションスキルには、基本的な四つのスキル「場をデザインするスキル」「対人関係のスキル」「構造化のスキル」「合意形成のスキル」があるとされます。「場をデザインするスキル」は、「環境の構成」という考え方、特に「状況づくり」が深く関係しています。「対人関係のスキル」は、安心感や信頼関係、そして「構造化のスキル」「合意形成のスキル」は子供と一緒に悩むという姿勢、すなわち子供の主体性や思考を促す“構え”に深く関係しています。

このような教師の視点と“構え”は、今日的な教育課題である「STEAM教育」や「非認知能力（社会情動的スキル）の育成」等乗り越えるヒントにもなり得ると考えられます。幼児教育施設に所属の皆様は、「〇〇遊び」という“かたち”ではなく、「遊ぶ」という行為に内在する教育的価値に一層深く意識を向けてみてはいかがでしょうか。小・中・高・特別支援学校に所属の皆様は、幼児期の教育の理解を進めてみてはいかがでしょうか。

（幼児教育センター 指導主事 中村 崇）

